

平成二十四年度

# 卒業論文概要

2013年1月提出

白井 志穂	1
劉向『列女伝』とその背景について	
小栗 未来	2
許蘭雪軒研究	
近藤 陽佳	3
三・一独立運動における民族代表について	
佐々木 百合香	4
パンソリと薷女唄の比較	
嶋川 望美	5
清末、中国人の日本留学に関する研究	
清野 愛	6
抗日戦争期における中間党派の動向	
谷口 青佑	7
工部局下水道整備からみる上海租界の都市形成	
祢津 詩央里	8
蜀による北伐の意義について	
野田 将人	9
否定を強める語気副詞について	
畑井 裕美	10
満洲映画協会の宣伝活動について	
林 千浩	11
『清平山堂話本』の「西湖三塔記」と「洛陽三怪記」の比較研究	
丸山 紗輝	12
張愛玲小説「花凋」研究	
吉田 早輝子	13
張天翼『宝葫蘆的秘密』研究	

新潟大学人文学部 地域文化課程

アジア文化履修コース

<http://hyena.human.niigata-u.ac.jp/files/asiac/asia.html>

## 劉向『列女伝』とその背景について

白井 志穂

『列女伝』は母儀伝・賢明伝・仁智伝・貞順伝・節義伝・辯通伝・擊嬖伝の全7巻から成り、合わせて104話が収録されている。主人公は全て女性で、歴史上有名な人物、もしくはその縁者が主人公となっている一方で、名もない人物が主人公となっている場合もある。

この女性のみを主人公とした書物の撰者こそ、前漢末期を生き抜いた学者・劉向であった。劉向はその名が示す通り、前漢王朝の皇帝一族の一人である。学者としての能力を買われ、側近として宣帝・元帝・成帝の3人に仕えた。しかしその人生は順風満帆とは言い難く、投獄や朝廷からの追放といった不遇の時代も経験している。劉向が『列女伝』を著したのは成帝に仕えていたころと伝えられる。当時は外戚の王氏一族が政権を握り、成帝は何の力も持たない、ただ名ばかりの存在となっていた。そして空虚な生活を送る成帝は女性に溺れ、前漢王朝の乱れに拍車を掛けたのであった。

本稿では『列女伝』の構成やその内容を分析し、劉向のどのようなメッセージが込められているのかを読み解くことに尽力した。また、その人物像に迫った上で『列女伝』執筆の動機が果たして皇帝や世情に対する戒めが目的であったのか、明らかにしようと試みた。

第一章では『列女伝』そのものについて考察した。話の形式は全話にわたり、ほぼ統一されている。またその内容も一見、独立しているように思えるが、実は根底部分に繋がりがあることが分かった。そこには決してぶれることのない劉向の強い意志と読者との気持ちの共有を望んでいる姿が垣間見えた。だからこそ、読者を飽きさせないための工夫や訴えかける姿勢が、『列女伝』から感じられるのである。

第二章では劉向の主張について、その生涯や他の著作との関連を交えながら考察した。『列

女伝』に分かり易く、自分の主張を書かなかったのは、元帝期に奉った上奏文が匿名であったにも係わらず、劉向であると発覚した経験が主な理由のように思われる。もちろん、直接自分の主張をそのまま書いたのでは、書物自体が稚拙に見えてしまう可能性もあったからであろう。そこには劉向の幼いころより培われた自尊心の強さが垣間見える。

『列女伝』が誕生したと思われる時期、政治の実権を握っていたのは外戚であった。名ばかりの皇帝となった成帝は、次第に女色に溺れていく。そして許皇后を廃し、舞妓出身であった趙飛燕・合徳の姉妹を寵愛したのである。外戚が一世を風靡し、その傍で情事にふける成帝の様子を劉向は見ている。前漢王朝の始祖たる劉氏一族の血を引き、なおかつ好學の一家において、幼いころより宮廷に出仕していた劉向自身は政治の中心にいない。それにも係わらず、外部の人間が権力を握っている様子を見て、良い気持ちはしなかつただろう。また、成帝に節度がないことはもちろんだが、彼を誘惑した女性たちを憎む気持ちも少なからずあったに違いない。外戚と趙姉妹、つまり女性とは劉向にとって諸悪の根源に他ならなかった。そんな劉向の女性への嫌悪感が、『列女伝』の中で最大限に表現されているのが、巻7の擊嬖伝であろう。男性やその周辺の人々、ときには女性自身までも巻き込み、破滅していくその姿は劉向が予見していた前漢王朝の姿そのものであった。

『列女伝』誕生の背景には劉向の自己顕示欲と女性への嫌悪感が少なからずあったのではないかと考える次第である。

## 許蘭雪軒研究

小栗 未来

朝鮮王朝時代、儒教を重んじる社会の中では、女性は学問をすることはおろか、字を習うことも好まれなかったが、後世に名を遺す女流詩人が生まれた。その中のひとりが、27歳という若さでこの世を去った許蘭雪軒(1563～89)である。先行研究では、蘭雪軒の生涯と詩を結びつけたものや蘭雪軒の心情と詩を結びつけたもの、詩の世界や世界観、表現方法、表現の美しさに関するものが目立つが、本稿では、蘭雪軒の生涯と作品を概観し、彼女の死後に編まれた『蘭雪軒詩集』の刊本比較と、収録作品の考察をおこなった。また、現存する刊本の照合と伝承経緯についても部分的に明らかにした。

第一章では、許蘭雪軒の生涯を年譜にまとめ、作品を紹介した。特に、「采蓮曲」の4句1文字目が、『鶴山樵談』では「剛」であるのに対し、『芝峯類説』を参照した張正龍(2007)及びイ・ジョンオク(2009)において、前者では「或」、後者では「遙」と記されていることを指摘した。

第二章では、初刊本の発行年代に関する議論と、その他の刊本を紹介した後、四つの刊本を比較した。管見の限りでは先行研究で言及されたことのないハーバード大学燕京図書館所蔵『蘭雪軒詩集』について、「重刊」の文字が見当たらないことや、張(2007)があげる初刊本と字形が同一なことから、このハーバード本を木版本の初刊本であると考えた。併せて、初刊本以外の刊本について、ホ・ミジャ(2004)に掲載されている6冊と、筆者が入手した『影印標點 韓国文集叢刊 67』(1991)を加えた8冊を紹介した。刊本比較では、ハーバード本(1608)、『蘭雪齋文集』(1997)、文臺屋治郎兵衛本(1711)、ホ・ギョンジン本(1999)の4種を6つの点に関して比較検討を行ったが、22箇所の違いを見つけ、ほとんどが誤植であることを指摘した。

第三章では、『蘭雪軒詩集』附録の作品3篇に

ついて先行研究が少ないことに注目し、ホ・ギョンジン本の現代韓国語訳を参照しながら、筆者試訳を示し、内容を考察した。「廣寒殿白玉樓上樑文」は、偽作ではないかという議論と、これを書いた年齢に関する議論があることを紹介した。「夢遊廣桑山詩序」は、一行目の「乙酉春余丁憂(1585年の春、私は父母の死に会った)」から、蘭雪軒の父・許嘩(ホ・ヨブ)が逝去した後に書かれたという推測を示し、姉が自分の死を予感していたようだという弟の許筠によるものと思われる割注についても触れた。「恨情一疊」では、神仙世界を描いた作品と作品の間に編者(許筠)がこの作品を収録したことに何か意図はあったのかという疑問を提起した。併せて、現行の蘭雪軒詩の日本語訳を検討した。

彼女の作品は多くの刊本に収められ、ハーバード大学の図書館にまで伝えられたが、日本では、『蘭雪軒詩集』は全訳されておらず、彼女に関する日本語の文献も数少ないのが現状である。ひとりでも多くの人が彼女の作品に一篇でも触れる機会があることを願う。

### 三・一独立運動における民族代表について

近藤 陽佳

1919年の三・一独立運動は、朝鮮において近代民族主義運動の原点となった事件である。本論文では、独立宣言書に名を連ねた天道教の孫秉熙、基督教の李昇薫、仏教の韓龍雲ら民族代表33人及び関係者に焦点を当て、三・一独立運動の準備期(1918年11月～1919年2月)に着目して彼らの動向を掴み、民族代表が三・一独立運動にどのような影響を与えたのかについて考察した。

第一章では三・一独立運動を大きな転換期として、武断統治時代と文化統治時代の二区分に分けた節立てを行い、朝鮮軍司令官の三・一運動日次報告や京畿道の朝鮮憲兵隊長報告書、陸軍大将宇都宮太郎の手記を取り上げて、当時の朝鮮国内の情勢について明らかにした。武断統治の基軸となった憲兵警察制度は民族運動鎮圧の主力を担い、それに抵抗を示した朝鮮民衆は植民地解放を目指して三・一独立運動に加わった。その結果、表面的な緩和政策は打ち出されたものの、実際は警察官の増員、朝鮮人の官吏登用は極一部、新聞・雑誌は度々押収や発行禁止などの処分を受けていたことが分かった。

第二章では、民族代表に焦点を当て、三・一独立運動関係者に対して行われた訊問調書や裁判記録を基に、三・一独立運動の指導者的印象が強い天道教幹部や基督教側の代表者、また宣言書作成に携わったとみられている崔南善など特定の人物を取り上げ、彼らの発言に着目しながら独立意識や役割、人物関係について検討した。天道教幹部の孫秉熙を例に挙げると、学生たちが企図した独立運動について、騒擾が禍となって平和的に朝鮮の国権回復を達成できない恐れがあると懸念していたこと、運動の大衆化を成し遂げた学生たちとの関連を強く否認していたことが訊問調書から読み取れた。

以上三・一独立運動における民族代表の動向

と朝鮮国内の状況について検討し、考察を行った。運動当初は宗教人や知識人、学生らが運動の主力を担っていたが、次第にその主導権を日本による収奪の被害を最も被った労働者や農民へと移し、ついには警察署や官公庁への襲撃を伴う武装闘争へと発展した。三・一独立運動は日本側の失政に対する世論を如実に反映した動きと言えるだろう。また、本論文で挙げた天道教幹部たちは、みな朝鮮独立を達成するために試行錯誤を重ねていたという共通性が見受けられた。当時の日本に対する朝鮮民衆の反抗心の高まりを考慮すると、彼らは独立に向けて立ち上がった先駆者という点において一定の評価を与えることができるだろう。

## パンソリと瞽女唄の比較

佐々木 百合香

パンソリは朝鮮の伝統芸能である。広大と呼ばれる旅芸人によって演唱され、語り手である唱者が鼓手の打つ太鼓の伴奏に合わせて、演技的動作を行いながら長編の物語を歌い語る。瞽女唄は、盲目の旅芸人である瞽女が三味線の伴奏に合わせてながら「葛の葉子別れ」「八百屋お七」「小栗判官照手姫」といった物語などを歌い語る芸能である。パンソリと瞽女唄は、生まれた国も、歌い語る物語も異なるが、楽器の伴奏に合わせて歌い語る点や、昔から伝えられてきた物語を語る点、師匠が弟子に演じてみせて伝承する点など、多くの共通点がある。パンソリに衰退期はあったが、その時期を乗り越えて現在も伝承が続いている。しかし、瞽女唄は伝承する歌い手はいるものの、盲目の旅芸人である瞽女はいなくなってしまう。本稿では、パンソリや瞽女唄の歌い手たちの生活や活動の様子、また、聴衆や歌い手たちを取り巻く環境や保護政策の点から2つの芸能を比較して違いを分析し、パンソリの伝承が途絶えることなく続いている理由、瞽女がいなくなってしまう理由について考察した。

第1章では、それぞれ代表的な歌い手を挙げて、彼女たちの生活や活動の様子を紹介した。パンソリは、もともと賤民階級の広大が主な歌い手だったが、次第に両班の歌い手も登場し、また、男性の唱者ばかりだったところに、女性の唱者が登場するようになった。身分や性別を越えて歌われるようになったという点は、伝承が続いていることに大きく関係しているのではないかと推測した。それに比べて、瞽女は規則が厳しく、盲目の女性に限られていたため、瞽女唄の衰退につながったのではないかと考えた。

第2章では、パンソリと瞽女唄それぞれを保護するための政策や活動を紹介した。パンソリ

に限らず、韓国では無形文化財に指定されると、その伝承者たちには補助金が支給され、それが生活や活動の大きな支えになっていることがわかった。しかし、日本では、重要無形文化財に指定された場合と、選択無形文化財に指定された場合とでは支援内容に違いがあり、瞽女唄は選択無形文化財として指定されたために瞽女たちは補助金を支給されなかった。この扱いの違いが現在の伝承状況に大きな差を生みだしたのではないかと考えた。

第3章では、取り巻く環境の変化がパンソリと瞽女唄それぞれにもたらした影響に焦点をあてた。パンソリも瞽女唄も、戦争や他の娯楽の登場によって、人々の関心が薄れてしまったり、活動に支障をきたすようになったことが明らかになった。

どちらの芸能も衰退し、危機的状況に追い込まれたのは同じであるにも関わらず、現在の伝承の状況を見ると、大きな差がある。それは、歌い手の条件がパンソリよりも瞽女唄の方が限定されていたこと、そして伝統芸能を保存・継承させようとする国の姿勢の違いから生まれたと考えられる。それぞれの伝承者には伝統芸能の保存、伝承にこれからも取り組んでほしいと切に願っている。

## 清末、中国人の日本留学に関する研究

嶋川 望美

清末に開始された留学は洋務運動のなかで展開し、また、日本留学は「変法自強運動」のなかで展開した。

第一章では、はじめに、洋務運動の発生から「変法自強運動」へと転換するまでを概観した。続いて、洋務運動期に洋務派官僚らによって行われた西洋式の学堂設立が、語学を中心とした教授から天文、数学などの学問、軍事、造船などの技術の教授と展開して行ったことを明らかにした。学堂である程度の知識が養われると、欧米への留学生派遣へと展開して行った。また、1870年代に公使館の設立が行われたことを契機として、日本への遊歴官の派遣と、日本語の通訳の育成を目的とした留学生の派遣が行われるようになったが、回数や規模は極めて小さなものであった。洋務派官僚らにとって当時の日本は学ぶことを目的に留学生を派遣する対象ではなく、明治維新の成果を参照し洋務運動推進の根拠としての位置づけがされていた。

第二章では、日清戦争敗北を契機として、継続して留学生の派遣が行われた1896年以降の日本留学について、その変遷を辿った。1896年に、清政府より13名の留学生が派遣され、以降、各省ごとに留学生が派遣されるようになった。さらに、私費で留学生が日本に渡るようになり、日本留学は隆盛へと至った。1902年に、留学生と駐日公使の衝突が起こった。この事件以降、清政府は留日学生が革命へ傾倒することを憂慮し、次第に留学生に対する管理や取り締まりを強化していくこととなった。

第三章では、清国人の日本留学と清国国内の教育状況の関連性について考察した。清は1904年に新たな学制を制定し、科挙の廃止と国内に学堂を設立することを規定した。科挙の廃止によって官吏登用の道を留学に求めたことや、教員の不足を日本の師範学校に留学することで補

おうとしたこと、当時国内に十分な数の学堂を設立する力がなかったことなどにより、1905年には留日学生数が大幅に増加することとなった。留学生の増加は、留学の質を落とし、1906年には日本留学始まって以来初めて留学制限が設けられた。さらに、清政府は一部の官費支給の停止など日本留学における政策の見直しを行い、同時に国内の教育推進をはかっていった。こうして1907年以降、留学生数は減少して行き、1909年には、ピーク時の半数である4000人となり、日本留学の質の向上も見られるようになっていった。

洋務運動期に開始された留学生派遣とは異なり、継続的かつ長期的に行われた日本留学では、留学開始時には規則が定められることなく行われ、留学生派遣を行う過程で各種章程や規則を制定し、留学政策を確立させていった。

## 抗日戦争期における中間党派の動向

清野 愛

現在の中華人民共和国では、建国を指導した共産党が絶大な権力を持ち、他の政党が国家運営に及ぼす影響は小さいように感じられる。しかし、抗日戦争から中華人民共和国成立へ至る道程において、共産党と国民党のどちらにも属さない「中間党派」と呼ばれる人々が、共産党と国民党の施策や、世論形成に対して大きな影響力を持っていた。中間党派と呼ばれる人々は多数存在するが、筆者は鄒韜奮（1895-1944）に関心を持った。鄒韜奮は、中間党派の一つである救国会の中心人物であるとともに、ジャーナリストとしての功績も大きく、1925年に創刊し1926年に主編に就任した週刊誌『生活』を皮切りに数々の雑誌を発行した。卒業論文では、鄒韜奮がジャーナリストとなるまでの経歴ならびに、満州事変を境に彼の主張は変化したのかを明らかにすることを目的とした。

第I章では、鄒韜奮がジャーナリストとなるまでの経歴を追った。鄒韜奮は、没落した官僚の家に生まれ、学費の工面に苦労しながら学生生活を送った。鄒韜奮は、新聞記者になるという夢を幼いころから抱いており、1923年に黄炎培が代表を務める中華職業教育社に入社した。中華職業教育社は、1925年に週刊誌『生活』を創刊し、1926年には鄒韜奮が主編に就任した。鄒韜奮は、週刊誌『生活』に読者からの投書とそれに対する回答を掲載し、読者の要望が誌面に反映されるよう努力した。

第II章では、週刊誌『生活』が廃刊処分追い込まれるまでや、生活書店が成立するまでの過程に焦点を当てた。週刊誌『生活』は、国民党からの弾圧により、1933年12月8日に廃刊処分を下された。また、これ以前には、週刊誌『生活』の発行を担う生活書店を、中華職業教育社から独立させる建議が胡愈之から提出され、1933年7月8日には、生活書店が成立した。こ

のことは、鄒韜奮がジャーナリストとして独立した象徴であったと言える。

第III章では、鄒韜奮が抗日活動を活発に行うことによって国民政府から弾圧を受け、海外生活を余儀なくされた時期について述べた。鄒韜奮は、1933年7月14日から1935年8月27日にかけて欧米へ渡航した。この渡航によって、鄒韜奮は資本主義の限界や矛盾を認識し、社会主義の優越性を意識した。

卒業論文では、鄒韜奮の経歴を追うとともに、彼の思想を明らかにしようと試みた。鄒韜奮の主張は、満州事変を契機に転換したとする研究が多い。しかしながら、鄒韜奮にとって、抗日救国運動を推進することと、中国を発展へ導く途を模索することは同等の重要性を持つ使命であり、同時に取り組むべき課題でもあった。鄒韜奮は、中国の前途に対する憂慮を以前から主張しており、それが満州事変を契機に表出したと解釈するのが、彼の思想を正確に捉えることへつながると考える。

## 工部局下水道整備からみる上海租界の都市形成

谷口 青佑

近代上海の出発はイギリスをはじめとする列強各国が上海に租界を開設したことにある。租界を通して近代技術・文化が浸透し、上海は近代都市へと変貌を遂げた。その都市形成の大部分を担ったのはイギリス租界の工部局という組織であるが、その研究のほとんどは道路を中心とした視覚的都市展開に依るものが多い。本稿では工部局が行った下水道整備、水道事業の展開に焦点をあて、それらが上海租界の都市形成にどのような影響を及ぼしたか検討した。

第一章では、イギリスをはじめとする列強各国の租界設置から、「土地章程」をもって租界における行政権拡大に至るまでの歴史的流れを概観した。

第二章では、租界の土地開発を行った工部局の概要を、「土地章程」「共同租界工部局規則」を基に考察した。工部局は道路埠頭委員会を前身とする行政執行機関であり、主に租界内における道路や埠頭、上下水道の計画・建設・管理を行っていた。その職務範囲は租界の拡大・人口増加に伴い拡大していった。工部局が開発した租界の主要交通は「馬路」と呼ばれる陸路であり、それまでの上海县城を中心とする水路を使用した交通・輸送のネットワークを破壊するこの「馬路」こそが、租界＝近代都市というシンボルになる。

第三章では、「共同租界工部局規則」を基に工部局の道路・下水道開発について考察した。租界内の道路開発における工部局の権限は多大であり、開発予定地に該当する借地人は障害物の撤去、また状況に応じて土地の提供が強制された。下水道整備に関してもこれらが該当しており、道路開発と同様に工部局によって強引に行われたことが確認できた。その背景には、工部局が財政難であったこと、借地人が生活環境の改善を急いだことが挙げられる。

第四章では、租界の拡張について地域的拡張を四期、越界路による線の拡張を三期に分け考察した。特に越界路拡張の第二期は、1899年の租界拡張から辛亥革命の勃発、清朝没落に至った期間であるため、地域的拡張が以前のような成果を上げることができず、越界路の重要性が増した時期である。租界側は越界路における課税権を得るため、「上海自来水公司」を通して租界外に給水を開始した。これにより、名目上は水道費の一部として、越界路付近の居住者から間接的に徴税することが可能となったのである。また一方で、水道事業を通じた課税は越界路地域を維持管理するための貴重な資金源となっていた。

以上、本論文ではこのように下水道整備、水道業が上海租界の近代化、都市形成に深く関わっていたことが確認できた。道路整備が都市形成の大部分を担うとすれば、その後を追うように整備された下水道にも同じような意味合いをみることができる。また、租界の拡張に関して越界路が持つ影響力の大きさから、水道事業と都市形成との関連性は深いといえる。



## 蜀による北伐の意義について

柁津 詩央里

漢室復興を掲げて蜀を建国した劉備は、魏の曹丕を篡奪者とみなし帝位に就くが、漢室復興を果たすことなく死去する。その後、劉備の志は政権首班者となった諸葛亮によって受け継がれ、対魏戦争である北伐が開始された。この北伐は、それ自体が蜀を正統化するものであり、故に国力を消費しながら国の滅亡まで続けられる程、蜀では重視された。しかし先行研究では、蜀政権各首班期にわけて北伐を論じているものが多く、その目的についても疑問に思う点があった。よって本稿では、諸葛亮の死に関わらず北伐を総合的に取り上げ、兵数や進軍ルート等北伐全体の整理を通じてその目的や意義について考察し、蜀の本質に少しでも迫ることを目的とした。

第一章では、蜀魏の北伐直前までの動向を概観し、北伐敢行の理由について論じた。劉備は、前漢景帝の末裔であると称しながら各地を転々とし、諸葛亮を迎え入れた。諸葛亮は、荊州・益州を拠点とし、西方南方の異民族及び呉と手を結び、秦川・荊州の両面から魏を攻める策を提示する。劉備は漢室復興を掲げて策を実行に移していくが、完遂することなく亡くなった。その後蜀の全権力を握った諸葛亮は、戦の準備を整えると、227年3月漢中へ駐屯し北伐を開始した。

第二章では、諸葛亮による北伐の動きについて論じた後、その目的と意義について考察した。北伐の出兵先が長安・洛陽とは逆の隴西・涼州方面であることについて、益州土着勢力と外来勢力の対立・魏蜀間の国力差・魏の涼州支配の脆弱さから、諸葛亮は、魏を討伐することが不可能だと考えたうえで、漢室復興を建前としながら、実際は交易利益によって蜀を強化するため、基盤を固めながら西域への交通を開こうとしていたのだと結論付けた。

第三章では諸葛亮没後の北伐について、蔣琬・費禕・姜維の各首班期にわけて論じた後、その目的と意義について考察した。蔣琬首班期は、諸葛亮の北伐を継承して隴西・涼州方面に出兵し、北伐計画によって漢室復興を実行すると見せかけ、実際は国内をまとめ蜀政権を保つために北伐を行ったと考えた。費禕・姜維首班期は、費禕が北伐に消極的であり、国及び政権を保持しようとしていたことを明らかにした。姜維首班期は、諸葛亮の北伐のほとんどを受け継いだものが姜維の北伐だと考えた。

第四章では、先ず各首班期の北伐を比較し、没後の北伐は諸葛亮の北伐を受け継いで行われたことを明らかにした後、北伐全体の目的は西域との交通を開くことだったと結論付けた。次に、北伐に対する人々の反対・批判と期待から、人々の北伐に対する理解とその位置付けについて考察した。益州土着勢力は、自領・自身の保護を満たす北伐から、自領を消耗する北伐という理解に変化し、流寓勢力にとっての北伐は、ただ国力を消費する無謀な戦であった。また、ここから北伐の目的を理解していた人物について考察した後、その理解が異なっていたために、北伐軍の構成員も変移し、結果的に人々の北伐に対する関心や期待も離れていったと考えた。最後に、北伐における蜀とは、北伐の目的を介して何とかまとまりを成していた存在であったと結論付けた。

以上、北伐は蜀にとって必要不可欠なものであった一方、結果的に蜀の存在を追い詰めるものでもあったことを明らかにした。今後、魏及び涼州・西域異民族の視点からも北伐を考えることで、諸葛亮と異民族の関係等更なる問題が解決され、蜀という国についてより深く迫ることが可能になると考える。

## 否定を強める語気副詞について

野田 将人

現代中国語において、否定を強める場合に用いる副詞は多く存在するが、その中でも“并、絶、决、毫”という4つの副詞については、一語で否定詞を修飾し、「決して～ない」「ちつとも～ない」という類似した意味になるから、共通性を感じることができる。しかし語自体が異なるため、伝達する情報やニュアンスは異なり、使い分けができるのではないかと考えられる。そこで本稿では、日本語において「決して（～ない）」「ちつとも（～ない）」などの意味を持つ、否定を強める副詞“并、絶、决、毫”の共通性と使い分けについて考察した。

第2章では辞書における其々の用例を先行研究と照らし合わせながら、語の副詞用法を持つまでの変遷過程をまとめた。4つの副詞は「語気副詞」とされているが、“并”には先設（“并”が使われる文の前に存在する、文脈や常識から判断される内容）をも否定する、“絶、决”は「断固とした」ニュアンスを含む、“毫”は「毛先の細さ」から転じて否定を強める副詞に変遷したという異なる特徴を挙げ、共通性の中に違いがあることを述べた。

第3章では現代中国語の北方の作家、杨沫《青春之歌》と王朔《看上去很美》、《我是你爸爸》、《顽主》の二つの時代の作品から用例を採り考察した。“并”は総括対象を「否定文及びその先設」とし、肯定の予測を否定する反駁の意味を含む。“并没（有）”の目的語に「主語＋述語」や「疑問代詞／指示代詞」を用いると、反駁の意をさらに強調できる。“絶、决”は意味・用法的に非常に近いが、“决”はより主観的、“絶”はより客観的な状況で用いる傾向にある。二つを使い分けられない場合、使用環境において主観と客観を区別する。“毫”は地の文に多く、“毫＋否定詞＋○○”という四字熟語を作りやすく、連用修飾や連体修飾の形式をとることが多い。以

上の傾向を第4章では筆者による作例で使い分けを試みた。

(日本語)「君は全然躊躇わないで、彼は絶対もう来ないだろう、と言った。だけどそれは全く何の根拠もないよ！彼はきつとここに来る。これだけは何としても譲らない。」

(中国語)“你[毫]不迟疑地说；他[绝]不会再来了。可是，这[并]没有什么根据！他一定来我们这儿。只有这我[决]不让步。”

“并、絶、决、毫”を比較対象とする先行研究は見られていないことから、本稿では用例を集め比較することで、普段意識せずに使用している語の意識的な棲み分けを行い、場面に応じた、より妥当な語の選択に近づくことが出来た。

## 満洲映画協会の宣伝活動について

畑井 裕美

崔満洲映画協会（以下、満映）は、映画による政治宣伝を行うことを目的として、南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）と満洲国との合同出資によって、1937年に設立された国策映画会社である。本論文では、満洲国建国以前から、満映が解体するまでの間、中国東北地域において、映画による広報宣伝活動は如何にして行われてきたのかを考察し、満洲における広報政策において、満映はどのような位置付けがなされていたのか明らかにした。さらに、当時満映が直接編集・出版に関わっていた雑誌『満洲映画』の内容分析を行い、満映が、雑誌というメディアを通してどのような宣伝活動を行ってきたのか検討した。

第一章では、満鉄映画班と弘法処の活動、満映が設立されるに至った経緯、そして、満映の活動について取り上げ、満洲国における映画による広報宣伝活動について検討した。当時、満洲国内において、映画を利用した広報宣伝活動は、1923年に満鉄内に設置された満鉄映画班と、1932年に満洲国政府が国務院に設置した弘法処とが中心となって行っていた。しかし、映画の委託製作や、映画による広報宣伝などの事業を統合した宣伝機関を設立することが、満洲国政府にとって喫緊の課題となると、1933年より、満洲国政府関係者が中心となって、満洲国に映画統制機構を作るための具体的な話し合いを進めていくこととなった。その後、数年にわたる準備機関を経て、1937年8月、満映は正式に発足する。満映は、1945年に組織が解体するまでの間、映画製作のみならず、映画フィルムの輸出入および配給の統制を行い、満洲国内の配給を一元的に管理した。

第二章では、雑誌『満洲映画』の概要について述べた。『満洲映画』は、1937年12月に創刊された、満洲国内で発行された唯一の映画雑誌

であり、映画による文化政策の推進力を補強する、いわば満映のスポークスマンとしての役割を担っていた。

さらに第二章では、『満洲映画』の記事を取り上げ、その記事内容の分析を行った。『満洲映画』創刊当時の満映は、アメリカ映画と上海映画の輸入が途絶えたことで、満映にとって重要な資金源であった、映画の配給収入が激減するという危機に直面していた。この時期の『満洲映画』には、満映の配給収入に言及した記事が多くみられ、基本的には満洲国政府の意向を容認する立場をとっていた。また、甘粕正彦が満映の2代目理事長に就任した1939年以降、満映では、甘粕による満映の機構改革の一環として、劇映画の製作の際、監督や脚本家に中国人を起用する動きが見られるようになった。この時期の『満洲映画』では、満映の映画製作方針に言及した記事が多く見られた。

以上、本論文では、満鉄映画班と弘法処、そして満映による映画の広報活動に注目した上で、雑誌『満洲映画』の内容分析を行った。満映設立以前の中国東北地域では、満鉄映画班や弘法処が中心となって、映画による広報宣伝を行っていたが、1937年の満映設立により、これまで広報宣伝の中心的な実施機関であった弘報処は、広報宣伝機関の管理機関としてその役割を変化させ、それと同時に、満映が広報実施機関としての役割を担うこととなった。雑誌『満洲映画』創刊時の満映は、配給収入の問題に直面しており、このことに言及した記事が多く見られた。また、甘粕正彦が満映の2代目理事長に就任した頃の『満洲映画』の記事には、これまでの満映による映画製作方針に対して、中国人の嗜好に合った映画作りをするには、満洲をよりよく理解することが必要だとする論調が多く見受けられるようになった。

## 『清平山堂話本』の「西湖三塔記」と「洛陽三怪記」の比較研究

林 千浩

『清平山堂話本』は明代の洪楩によって編纂された、もっとも古いといわれる話本集である。そのなかに収録されている「西湖三塔記」、「洛陽三怪記」は簡単に述べると、どちらも主人公が美女に化けた妖怪らにつきまとわれ、少女の助けによって逃げ出し、道士がそれらを退治するという話で、大筋が似ている。その成立については諸説あり本論文ではこの2作品を取り上げ、その先後を検証することを目的とした。

第1章では『清平山堂話本』の概略と二作品のあらすじ、先行研究について述べた。

第2章ではそれぞれの構成と人物を取上げて比較、分析した。話の作り方については、「洛陽三怪記」は話の筋が単純明快で分かりやすく、書き方の技法がより凝ったものであることを指摘した。また同時に人と妖怪との境界についても言及した。「西湖三塔記」の妖怪たちは、主人公の肝を取ろうとする場面で人らしさを繕おうとしないなど、作者が人と妖怪の区別をはっきりとしていない。「洛陽三怪記」にも似た場面があるが、こちらは「西湖三塔記」とは異なり、妖怪の側に人の世のルールを理解させているなど、作者が人と妖怪をはっきりと区別している。また作品中の恐怖の性質に関しても述べた。「西湖三塔記」には妖怪たちによって直接危害を加えられるという、目に見える明確な恐怖があるが、「洛陽三怪記」では何が起るかわからない、内から湧き上がる恐怖を描いているのだ。

第3章では前章で比較し、挙げたそれぞれの内容の特徴をもとに、話そのものからこの二作品の先後を検討した。「洛陽三怪記」は「西湖三塔記」よりも話がわかりやすいという点や進め方が凝っているという点については、「洛陽三怪記」が「西湖三塔記」から派生してより洗練されていたからだとした。書き方の面でもう一点、各作品の恐怖の性質も取り上げたが、「西湖

三塔記」は明確な恐怖、「洛陽三怪記」は静的で、不安のように内から湧き起こる恐怖を描いているが、「洛陽三怪記」にも明確な恐怖が見て取れることから、「西湖三塔記」の書き方をもとに一步踏み出して、質の異なる恐怖を作り上げたからだろうとした。また人と妖怪との線引きについては、「西湖三塔記」は人の世界と妖怪の世界の区別がなく、「洛陽三怪記」は人と妖怪にはっきりとした線引きがなされている。「洛陽三怪記」において肝を食べるなど人にとって良くないと思われることを妖怪の側にも意識させていることから、人と妖怪との区別というのは、倫理観や道徳観の発展に伴って生まれたものだとし、ここからも「西湖三塔記」の方が古いものだと述べた。

「西湖三塔記」の語り口調が明らかに南宋よりも後のものであるという指摘もあるが、これについては後になって手を加えられたという可能性もあり、その成立を南宋であると断ずることはできない。しかし少なくとも二作品の先後は、内容を見る限りでは「洛陽三怪記」の方が後に作られたものであると結論付けた。

## 張愛玲小説「花凋」研究

### — 希望と絶望の連鎖に翻弄される女性たち —

丸山 紗輝

張愛玲（1920～1995）は、上海、香港、アメリカと拠点を変えながら、生涯を通して創作活動に従事した女性作家である。主に男女の恋愛を描き出す作風を得意とし、時代や人間の欲望に翻弄されながらも生きる中流階級の庶民や上流階級から没落した家庭を描き出すことが特徴的である。本稿では張愛玲が執筆した小説のうち、「花凋」（1944年）を中心とした小説4篇と散文を、張愛玲小説の特徴である色彩表現と小説技法というそれぞれ異なる側面から考察し、彼女が描く女性像の実態に迫った。それによって小説中の女性人物たちに込められた張愛玲の主張を導き出し、張愛玲小説の中で描かれる女性の立場と「花凋」の悲劇性の根源を明らかにすることを目的とした。

第一章では張愛玲の略歴、主要前期小説、張愛玲文学の特徴をまとめた。

第二章では本稿で取り上げる小説4篇のあらすじ、本稿のテキストとして扱う小説集『伝奇』についてまとめた。

第三章では、小説「花凋」の中で最も多用されている色彩として「白」に注目し、張愛玲が「白」に仮託している性質として四つの特徴を導き出した。それらの特徴から、張愛玲の描く女性の悲劇性の根源を、受け継がれる結婚観による負の連鎖の影響だと考察した。

父親に逆らえずに耐え忍ぶ母親の姿を見ながら娘は育ち、そのためよき結婚こそ女性が幸せになれる唯一の手段と見なした彼女たちは、結婚に活路を見出す。だが次の居場所に希望を求める娘たちも、結婚後は結局自分の母親のような立場となって、新たな娘を育てていくことになる。張愛玲はこのような長い歴史の中で形成された女性の持つ負の連鎖を暴きだし、「白」の比喩表現によって女性の悲痛な心情を導き出しているのだと分析した。

第四章では、張愛玲小説の特徴の一つとして注目した「不規則な対照」手法を分析し、張愛玲小説には「真」「好」で構成される価値体系が存在し、登場人物らがその価値体系に従って行動していることを証明した。

このように張愛玲小説には、女性の持つ負の連鎖の構造が示され、そこに身を投じる他ない不条理な境遇を持つ女性たちの姿があった。そこには家庭という舞台の中で悲劇のヒロインを演じようとする者や、婚姻取引という場の商品となって表面上の付加価値を磨く者が特徴的に描かれていた。それらの女性たちは、自分たちが他者から品定めされる観賞対象であることを自覚し、負の連鎖の中に身を投じることを望む傾向がある。張愛玲は簡単には変わりようのないこのような女性の実態を示し、現代の女性に対して警鐘を鳴らしているのだと考察した。また、筆者が「花凋」に感じた悲劇性の根源は、女性の受け継がれる結婚観による逃れようのない負の連鎖に起因していると結論付けた。張愛玲小説「花凋」は主人公の短い人生の更に一部分を切り取って構成された短編小説であるが、張愛玲が女性人物に託した主張や人間の本性が凝縮されている、評価すべき小説の一つだといえよう。

## 張天翼『宝葫蘆的秘密』研究

吉田 早輝子

張天翼(1906 - 1985)は中国湖南省湘郷の出身。中学を卒業後、絵画の勉強をして一時画家になろうと志したが、その後新聞記者や教師などを経て、1928年初めて小説を発表して作家生活に入った。以来多くの作品があり、中国における代表的な作家であり、児童文学者である。今回取り上げる『宝葫蘆的秘密』は1957年に『人民文学』に発表された長編童話である。58年に中国少年児童出版社から一冊の単行本として出版され、その後何世代にもわたって中国の少年少女に読み続けられてきた。本論文では、『宝葫蘆的秘密』の作品分析を通し、当時の時代背景、作者が読者の子供たちに伝えたかったことなどを明らかにすることを目的とした。

第一章では張天翼の略歴、主要児童文学作品の紹介、童話創作の目的、中国児童文学史の中で彼が果たした役割についてまとめた。

第二章では『宝葫蘆的秘密』の作品分析をさまざまな角度から行った。まず第一節では、作品紹介をした。第二節では、宝葫蘆が王葆のために出した食品や物を表にまとめて、当時の子供たちの興味や時代背景について考察した。第三節では作品内においてどのような事件が起こったのかをまとめ検討を行った。第四節では張天翼の童話の特徴ともいえる幻想性と現実性の結合について考察した。幻想性が表れている部分として、言葉を話す金魚を取り上げた。金魚たちが王葆に話しかけてくる時は必ず王葆が孤独を感じたり、不安を抱えているときであったことからこの言葉を話す金魚は王葆の心の隙間を埋めるもの、また王葆の寂しさの象徴であると指摘した。現実性が表れている部分としては、科学を尊重する考え方と生き生きと描かれている子供たちの様子を例に挙げた。第五節では、作者の伝えたかったことは何か、またどのように表現されているのかを、登場人物の言葉から、

宝葫蘆の行方から、という二つに分けて考察した。その後これまでの考察を踏まえて、作者が本作品を通して子供たちに伝えたかったことは何か、ということについて筆者自身の考えをまとめた。

作者は宝葫蘆に自身が批判したい考え方や行動を投影し、最後に王葆がそれらに打ち勝つ、という過程を通して子供たちに教訓を伝えようとしていた。宝葫蘆に投影されていたのは、「勞せずして手に入れる」という誤った思想意識であった。また、王葆が宝葫蘆の誘惑に打ち勝ち、それを手放すという一連の過程を通して、人生の意義や目的を読者に考えさせることに成功している。『宝葫蘆的秘密』は子供のための教育童話という側面と、1950年代の中国社会の子供たちやその周りの人々の生活状況を知る貴重な資料という側面を持ち合わせている。作品を通して描かれていた教訓はいつの時代にも通じるものであり、内容も比較的分かりやすいので、作品としては十分評価に値すると結論付けた。